

# 研究の概要

## 研究主題

本気で考え，学びを深める授業の創造

～各教科等の見方・考え方を働かせる指導の工夫を通して～

### 1 研究主題設定の理由

将来の予測が困難な、複雑で変化の激しい社会を生きる子供たちには、様々な問題に自ら立ち向かい、それぞれの状況に応じて最適な解決方法を探り出していく力や、様々な知識や情報を活用、発揮しながら自分の考えを形成したり、新しいアイデアを創造したりする力が求められている。こうした中、新学習指導要領では「生きて働く『知識・技能』」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」を一人一人の子供に育成するために「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行っていく必要性が示されている。

このような状況の中、本校は昨年度、研究主題を「本気で考え，学びを深める授業の創造」とし、副主題を「各教科等の見方・考え方を働かせる指導の工夫を通して」として研究を進めてきた。「本気の学び」を実現するため、児童の実態・既存の知識を踏まえたりアリティのあるクオリティの高い課題を設定したり、学びに浸れるような学習環境を創ったりした。また、「深い学び」を実現するため、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる指導の工夫を行った。その結果、授業において課題を自分事として捉え、主体的に学ぶ児童の姿や、児童が教科の特質に基づいて対象を捉え、認識したり働きかけたりし、各教科等の内容をより深く理解する児童の姿が多く見られた。

しかし一方で、研究の成果が日常の授業に反映しにくいことが課題として挙げられ、研究内容の汎用性を高める必要性が明らかになった。

したがって本年度は、昨年度の主題・副主題を継続し、深めていくこととする。そのために、児童の「本気の学び」を実現する指導の工夫をさらに充実させる。また、「深い学び」を実現するために各教科等の見方・考え方を働かせる指導の工夫についても追求を続けるとともに、研究の成果を類型化することで汎用性を高め、日常の授業改善に繋げる。日常的に「本気で考え，学びを深める授業」を創造することで、各教科等で求められている資質・能力を児童に的確に身に付けさせたいと考える。

## 2 研究仮説

各教科及び総合的な学習の時間において、児童が本気で考えるための指導の工夫及び、児童の深い学びに繋がる各教科等の見方・考え方を働かせるような指導の工夫を行う。そうすれば、本気で考え、深く学ぶ授業となり、児童に各教科等の資質・能力を的確に身に付けさせることができるであろう。

## 3 研究内容

本年度の研究を推進するに当たり、次の研究内容を設定し具体的な方策を示す。

### ①「本気」の学びのために→児童にとって有意義な学習

○魅力的、連続的・発展的、価値的の三つの視点から教材の吟味・選択を行う。

○「課題発見・解決学習」の視点から単元構成の工夫を行う。

・児童にとって有意義な学習となるための「課題の設定」過程の充実

・児童が学びの質と内容を自覚できる「まとめ・振り返り」過程の充実

### ②「深い」学びのために→生きて働く知識・技能の獲得と思考力・判断力・表現力の育成

○各教科等の特質に応じた「深い学び」「見方・考え方」について明らかにする。

○各教科等の見方・考え方を働かせる指導の工夫を行い、実践内容・方法を類型化する。

○思考スキル・思考ツールの活用の仕方について整理する。

○「課題発見・解決学習」の視点から単元構成の工夫を行う。

・生きて働く知識・技能の獲得、思考力・判断力・表現力の育成へと繋がる「学びの深化」過程の充実

## 4 検証の指標

検証の視点	方法	検証の指標	達成目標
①本気で考え 学びを深める授業を創造することができたか。	授業評価表	研究授業における教師の相互評価	肯定的評価 3.2 以上 (4段階評価)
	教師アンケート	教師の肯定的評価	
②ねらいとする資質・能力を育成することができたか。	児童アンケート	児童の肯定的評価	肯定的評価 3.2 以上 (4段階評価)
③教科において児童の理解を深めることができたか。	単元末テスト	研究教科における単元末テストの正答率	正答率 85%
	各学力調査を基にした評価問題	活用する力を問う問題	正答率 70%

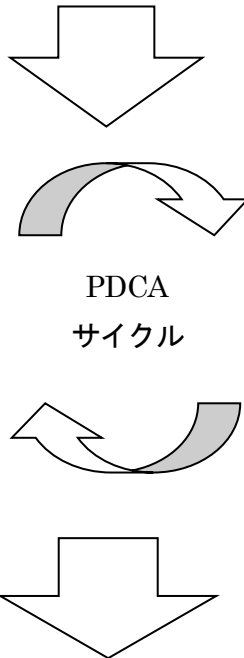
## 5 検証計画

### 研究計画

- 文部科学省や広島県教育委員会の「広島版『学びの変革』アクション・プラン」等の施策を踏まえて研究内容の吟味をする。
- 前年度までの研究の成果や課題を基に、本年度の研究の方向性や重点化を図り、研究仮説・検証の指標・達成目標を明確にする。
- 各教科等の研究内容については、前年度までのデータや本年度の児童の意識調査を基に児童につけたい力を明確にし、指導方法の工夫・改善の計画を練る。
- 理論構築に当たっては、これまでの理論研究を踏まえながら、外部講師及び教育委員会との連携を図り指導・助言をいただくとともに、先行研究をしている学校及び書籍等を活用し、研究推進委員会・各教科部会等で吟味する。

### 研究授業による検証

授業づくりの視点を明確にし、研究推進委員で提案した理論研究に基づいた学習指導案の作成・検討・事前研修・授業のシミュレーションを行い、検証のねらいや指導方法の工夫について吟味する。



授業づくりの視点に沿って、指導の意図を明確にした指導を行う。授業後は協議会を設け、指導法の妥当性や児童への効果を明らかにするとともに改善策を講じる。協議会には、ラウンドスタディの形態を取り入れ、多様な意見を引き出すとともに、意見交流と共有の時間を確保することで、校内研修の一層の活性化と内容の充実を図る。

### 研究の評価

- 研究授業後、大学教授、県教委・市教委の指導主事による指導・助言
- 授業評価票に基づく参観教員の「授業を観る力」「分析する力」の充実
- 研究の成果と課題の明確化

### 研究のまとめ

- 仮説に沿った検証の結果の具体化
- 研修の成果と課題のまとめ及び次年度の研究の方向性の提示

## 6 校内研修計画

### RESEARCH 前年度の研究成果と課題の分析及び児童の実態把握

- 4月
- ・前年度の研究成果と課題分析
  - ・研究推進計画案
  - ・研究組織づくり
  - ・研究の年間計画案

### PLAN 前年度の研究成果と課題を踏まえた、本年度の研究の方向性の決定

- 5月
- ・研究方法（各教科テーマ、仮説、検証の指標、達成目標）の確認
  - ・本校の研究理論構築・第一次案作成
  - ・研究理論構築
  - ・児童の実態把握（アンケート等）
  - ・学習環境整備
  - ・学習指導案様式の提示

### DO 研究仮説に基づく研究授業の実施

全体研修：研究の共通認識の確認

部会研修：各教科部会のねらいに沿った研究内容の深化の確認

研究協議会の実施

協議の視点の明確化、研究テーマに沿った活発な意見交流ができる研修方法の工夫、ワークショップ型の研修による全教職員の積極的な協議への参画化

- 6月～7月
- ・各教科、総合的な学習の時間の授業提案（全体研修）
  - ・教科部会による授業提案（部会研修）
- 8月～9月
- ・研究授業の成果と改善点の明確化（全体研修）
  - ・学習指導案検討
  - ・理論検討（部会研修）
  - ・学力テストの考察と課題克服の方向性（全体研修）
  - ・児童質問紙による調査及び前回との比較・考察（全体研修）
- 10月～11月
- ・教科部会による授業提案（部会研修）
  - ・生活科・総合的な学習の時間の見直し（学年研修）

### CHECK 各部会での研究が研究テーマにどのようにリンクしているのかの検証及び理論研究の再構築化

- 12月
- ・音楽科・体育科授業研究（全体研修）
  - ・児童質問紙による調査及び前回との比較・考察（全体研修）
- 1月～3月
- ・道徳科研究授業（全体研修）
  - ・研究のまとめ（冊子作成）
  - ・研究の成果と課題
  - ・次年度の方向性

### ACTION 本年度の研究のまとめ及び次年度の研究への指針

- ・独創100周年プロジェクトへ向けてのファーストプラン検討

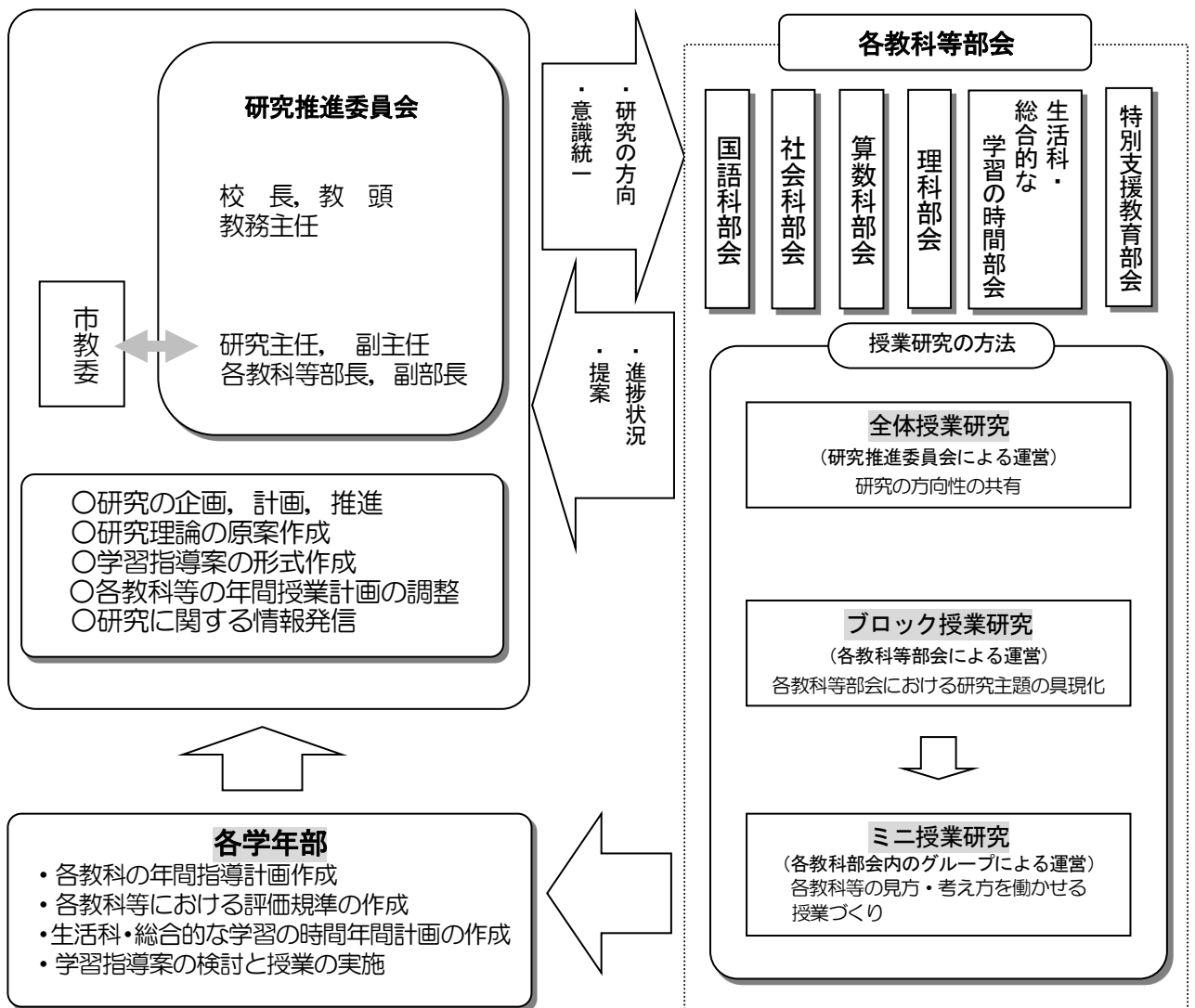
## 7 研究組織と活動内容

研究主題の具現化を図るため、研究推進委員会による研究推進の計画・立案を基に、全職員による効率的で効果的な研究推進体制の確立を目指す。また、研究推進に当たっては、PDCA（実態把握・計画→実践→評価→改善）のマネジメントサイクルによって、研究内容・理論と目指す授業の一体化に向けて取り組む。

研究主題

# 本気で考え、学びを深める授業の創造

～各教科等の見方・考え方を働かせる指導の工夫を通して～



## 8 本校が目指す授業

### (1) 本校が目指す授業像

本校は、全ての児童が「本気で考え、学びを深める授業」を目指している。真面目に学習に取り組む姿を超えて、全ての児童が学習にのめり込み、思考を深める姿を求めていく。

#### 本校が目指す児童が本気で考える授業像

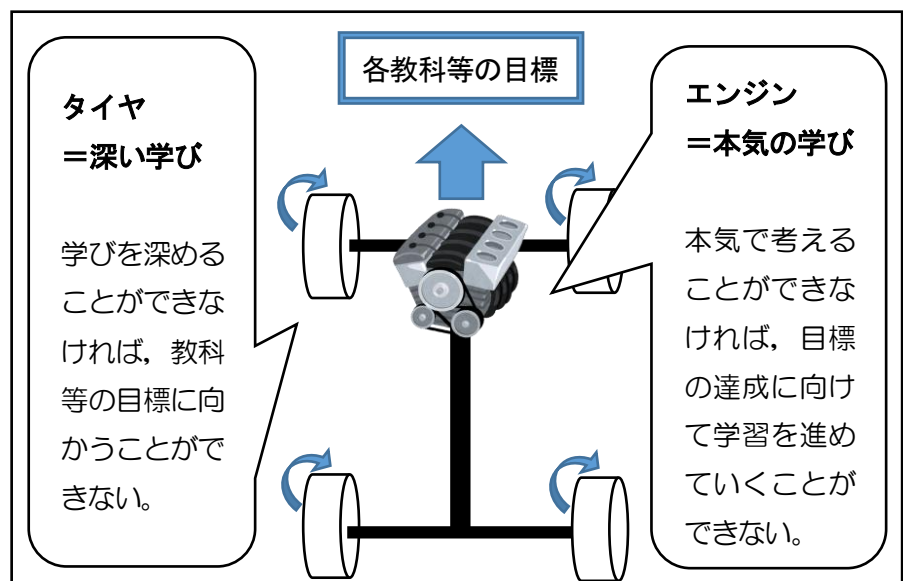
- 全ての児童が、学習に没頭する授業
- 全ての児童が、自己の力を精一杯発揮して学ぶ授業
- 全ての児童が、充実感や達成感を味わえる授業

#### 本校が目指す児童が学びを深める授業像

- 自己がもっている知識・技能を活用して、課題を追求する授業
- 課題の追求を通して、知識を再構築する授業
- 一人一人の思考が授業前と比べて変容（高まり、深まり、広がり）している授業

児童が本気で考える授業と児童が学びを深める授業とはそれぞれ別々のものではなく、相互に関連し合っている。児童が本気で考えること（没頭する・自己の力を精一杯発揮する・充実感や達成感を味わう）は、学習を進めていくためのエネルギーであり、車でいえばエンジンにあたるといえる。また、児童が深く学ぶこと（知識・技能を活用する・知識を再構築する・思考が変容する）は、目標の達成に向けての方向性を示すものであり、車でいえば車輪にあたるといえる。エンジンが作動しないと車は前に進まないように、本気で考えることができなければ、目標の達成に向けて学習を進めていくことができない。また、

車輪がうまく動かないと目的地にたどり着くことはできないように、学びを深めることができないように、学びを深めることができないならば、各授業のねらいを達成することは難しい。したがって、本校では「本気で考え、学びを深める授業」を目指し、児童が各教科等の目標をよりよく達成できるようにしている。



## (2) 児童が本気で考える授業に向けて

本気で考えるためには、児童が次のような思いをもつことが必要であると考えます。

- ・「不思議に思ったことを解明したい」という知的好奇心を満たした思い
- ・「困った状況をよくしたい」「もっと楽しくしたい」など、不十分な状態をよりよくしたいという思い
- ・「これを作りたい」「成功させたい」という目的達成への思い

このような思いをもたない限り、児童にとって本気で考える必然性がない。よって、このような思いをもたせることが児童に本気で考えさせるための前提である。しかし、「こうすれば解決することができる」といった解決への見通しが全くもてない状況であれば、児童は考えることができず、解決への意欲も損なわれてしまう。したがって、児童に「〇〇を解決したい」という思いをもたせるとともに、どのようにすれば解決することができるのか、どのような状況で解決したといえるのか等の方法や結果の見通しをもたせることが必要となる。児童が問題を見出し、解決への見通しをもつまでの一連の流れを、本校では「課題発見」と捉えている。

さて、人は何か未来を見通すとき、過去に得た情報や経験をその主たる材料として用いる。そこで、学習の振り返りの活動が重要な意味をもつ。児童が既習事項や学習過程を振り返り、「何を学べたのか」「どのように調べたら解決できたのか」等を整理することで、見通しの過程で過去の振り返りが有効に働き、より具体的で本質的な見通しとなり得る。さらに、振り返りの活動により、児童が学習内容や学習そのものへの価値を自覚し、次の学びを本気で考える「学びに向かう力」を養うことにも繋がる。



## ①「課題の設定」過程を魅力あるものに

児童が、教師側から一方的に与えられたものを本気で考えたい問題として捉えるとは限らない。児童一人一人が自ら見出した問題こそが学習課題となり得るという考え方で授業を創造していくことが大切である。とはいえ、学習課題の言葉を児童から引き出そうと質問を繰り返すようなことをしている、児童にとって追求したい学習課題を設定することはできない。本校では、児童に疑問(?)や驚き(!)、さらにはあこがれなどの感情に訴えかけるような事象を提示したり、体験をさせたりすることが最も効果的であると考えた。感情を伴った学習課題を設定することができれば、児童にとってその学習課題は有意味であり、追求したい、追求すべきものとして認識される。児童の意識を学習に向かわせる第一歩である学習課題の設定は非常に重要な活動であり、この活動が教科の目標の達成度に大きく影響を与えるといっても過言ではない。

そのために、単元を「児童が問題を解決する(目的を達成する)学習活動のまとめ」とし、導入の過程「課題の設定」において、児童にどのように問題を見出させ、どのように見通しをもたせることが、児童にとって有意味な学習課題を設定することに繋がり得るのかを整理した。

### 「課題の設定」過程の五つのモデル

- I 【ナゾ究明型】 児童から生まれた疑問を解決するための学習課題
- II 【目的達成型】 不十分な状態をよりよりよいものにする等のゴールを見据えた学習課題
- III 【体験発見型】 体験を通して生まれた疑問や驚きから設定する学習課題
- IV 【憧れ願い型】 児童のやりたいことや作りたいものを実現させることに繋がる学習課題
- V 【生活関連型】 児童の身の回りや生活の中と学習内容を関連付けた学習課題

「課題の設定」過程を五つのモデルに類型化したが、児童にとってこれから学習する単元が有意味なものとなるためには、大きく分けると「疑問の解決」、「目的の達成」の二つが鍵となる。そういう捉えでいけば、五つのモデルのうち、①と②が基本であると言える。③～⑤は、児童が「疑問の解決」、「目的の達成」に対して、より自分事として考えられるようにする工夫といってもよいかもしれない。

尚、当然のことであるが、どのモデルにおいても教師は教科の目標の達成をねらうことが目的である。児童の意欲を高めることのみにとらわれて、教科の目標の達成に向かうことが困難な学習課題を設定することのないように留意する必要がある。また、教師は、「〇〇の力をつけたい」という目的をもって学習を進めるが、児童は「□□を完成させたい」という目的をもって学習を進めるといった教師側と児童側の目的は違ってくることを認識して学習課題の設定を行っている。



## Ⅰ ナゾ究明型

児童に疑問をもたせ、その解明を学習課題とするモデルである。児童自らが疑問をもつことができれば、「疑問を解決したい」という思いに発展することは容易であり、それが学習課題となる。児童に疑問をもたせる際のキーワードとして、「すれ」「隔たり」が挙げられる。既習事項や児童の意識・経験とのすれや隔たりを感じさせることがポイントである。そのためには、写真やグラフ等の各種資料を提示する際に、一部だけを限定する、順序を変える等の工夫を行ったり、複数の資料から得られる情報を比較したり、情報と経験を比較して違いを見出させたりすることが必要である。

### 実践事例① 2年 国語科「なかまをふやすひみつ図かんを作ろう～たんぽぽ～」

<単元のねらい>

- ・植物に関する文章を読み、仲間を増やすことと、そのための体の仕組みとの関係性に着目し、文章の中の重要な語や文を考えて選び出すことができる。

課題の設定のポイント！ → 児童の実態を踏まえた資料提示により、疑問(?)を引き出す

児童の実態を考えると、たんぽぽが咲いている様子を見た経験はあるが、群生しているたんぽぽを見る機会はほとんどないと考えた。そこで、たんぽぽが咲き誇っている写真を提示し、児童から「なぜこんなにたくさん生えているのだろう」「どうやってこんなに増えたのだろう」という疑問を引き出し、教材文を読む目的をもたせた。その後、児童とともに学習計画を立てた。



すごい！こんなにたんぽぽが咲いているところ見たことない！

教科書の「たんぽぽ」に、その秘密が書いてありそう！

教科書の「たんぽぽ」を読んで、たんぽぽの仲間の増やし方の秘密を見付けよう！



いつも見ているたんぽぽはこんな感じだけど・・・。



実践事例② 5年 社会科「未来に米進 日本の米作り～米作りのさかんな地域～」

<本単元のねらい>

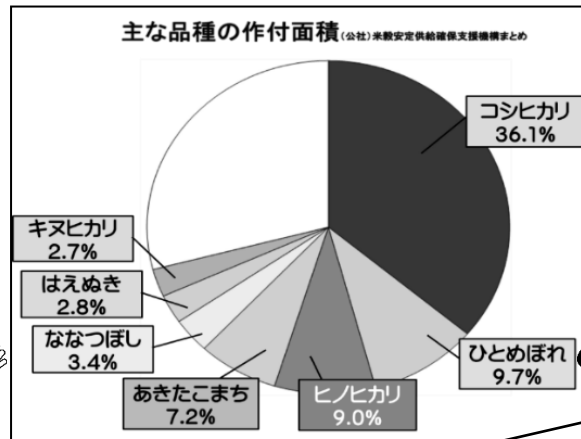
- 生産者や販売者などの稲作にかかわる人々が、自然条件や消費者の需要に合わせて稲作を行っていることや、それらの取組が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを捉えることができる。

課題の設定のポイント！ → 二つの情報のずれから疑問(?)を引き出す

日本で栽培され、流通している米の品種の約 300 種類を児童に提示した。児童は、普段目にしたり食べたりしている品種以外に多くの種類があることに大きな驚きを感じた。その後、日本で栽培されている米の約 35%、広島県で栽培されている米の約 45%がコシヒカリであるという事実を提示した。そうすることで、児童から「なぜ米の品種は約 300 種類もあるのに、コシヒカリだけがよく栽培されているのだろう」という疑問が生まれた。それが、そのまま単元を通して追求したい学習課題となり、そのために学びたいことを出し合い、学習計画とした。

品種名	生産者	生産地	特徴	生産者	生産地	特徴	生産者	生産地	特徴
コシヒカリ	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い
キヌヒカリ	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い
はえぬき	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い
ななつぼし	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い
あきたこまち	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い
ヒノヒカリ	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い
ひとめぼれ	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い	新井	新潟県	粘りが強い

約300種類



米の品種ってこんなにあるんだ！  
知らなかった！

何で、コシヒカリだけがこんなに多く栽培されているのかな。コシヒカリの秘密を調べたい！



歴史、味のよさ、人気のヒミツ、他の品種との値段の違い、栽培のしやすさ等を調べたら問題を解決することができそうだね！

## II 目的達成型

児童に目的意識をもたせ、その目的の達成のために学習を進めていくモデルである。ここでいう目的とは、「〇〇を作りたい」といった製作物の完成への目的であったり、不十分な状態をよりよくしたいという目的であったりする。また、他者からのお願い（ミッション）を引き受けるという場合も考えられる。それらの目的意識をもつことで、児童の学習に対する意欲は向上する。さらに、目的意識が高ければ高いほどその効果は上がっていく。そのため、児童実態を十分に考慮し、児童に目的意識をもたせることができる作品や事例等を提示する必要がある。また、最も重要なことは、その目的を達成することが、学習を進める教科の目標を達成することにぴったり対応していることである。

### 実践事例③ 5年 総合的な学習の時間「はなマル西条①～酒蔵通りの日本遺産認定を応援しよう～」

<本単元のねらい>

- ・地域の伝統、文化や、町の発展に尽力している人々の思いを知るとともに、それを大切に、地域の発展のために自分にできることを実践しようとする心情を養う。

課題の設定のポイント！ → 使命感をもたせることで、目的達成への意欲を高める

東広島市役所の方に、市は酒蔵通りの日本遺産認定を目指しているが、地域全体の機運が高まっていない現状について話をさせていただき、地域を盛り上げて日本遺産認定への機運を高めていく必要を感じさせるとともに、「東広島市日本遺産子ども大使」への就任要請を受け、使命感をもたせた。さらに、保護者アンケートの結果から、自分達のイメージと地域や保護者のイメージとの「ずれ」を感じさせ、まずは保護者に酒蔵通りの魅力を知らせようという目的達成への見通しをもたせた。



教育長さんに、東広島市日本遺産子ども大使に認定していただいたんだ。うれしいな。

子ども大使として、何としても東広島市が日本遺産認定されるようにがんばらなくては！



東広島市が、日本遺産を目指していることを知っていますか。		酒蔵通りに行ったことがありますか	
はい 29%	いいえ 71%	週1回 9%	
日本遺産認定の実現のために何か協力しましたか。		月1回 18%	
はい 2%	いいえ 98%	年1回 73%	

えっ？地元に住んでいるお家の人も全然知らないんだ！

酒蔵通りにほとんど行ってないみたいだし、まずは保護者から広めなくてはいいね。



保護者アンケートの結果（一部）

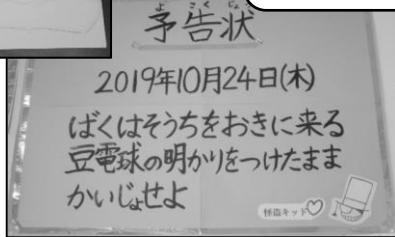
#### 実践事例④ 3年 理科「豆電球3兄弟を救い出せ！ ～明かりをつけよう～」

<本単元のねらい>

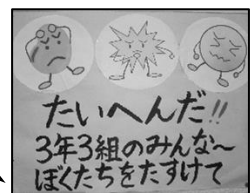
- ・乾電池と豆電球などの電気を通すつなぎ方と通さないつなぎ方，電気を通す物と通さない物について理解することができる。

課題の設定のポイント！ → 高揚感を感じさせることで，目的意識を高める

豆電球をモチーフにしたキャラクター「豆電球3兄弟」が困っているという場面を設定し，複雑な回路の途中に，電気を通す物や通さない物を入れている装置を見せた。電気の通らない何力所かの導線を切って，豆電球の明かりを灯し続けたまま，装置を解除しないといけないということを伝え，「3兄弟を救い出すには，どの導線を切ればよいだろうか？」という中心課題を設定した。



どの導線を切れば豆電球3兄弟を救えるのだろう。



豆電球3兄弟を救うために，電気について詳しく学習をしたいね。



#### 実践事例⑤ 1年 算数科「けっぺい！ながさチャンピオン ～どちらがながい～」

<本単元のねらい>

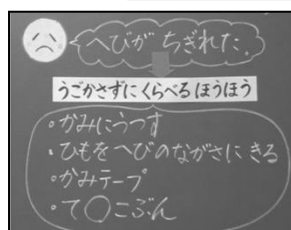
- ・長さの比較などの活動を通して，長さや測定についての理解の基礎となる経験や，長さについての感覚を豊かにすることができる。

課題の設定のポイント！ → 困難な状況を作り出すことで，目的達成への意欲を高める

隣の小学校の1年生から届いた「へびの長さ比べをしよう！」というビデオレターを視聴し，自分たちも長いへびを作って長さ比べをしたいという意欲を引き出した。さらに「動かすとへびが切れる」といった，直接比較ができない状況を作り出すことで，直接比較以外の方法に目を向けさせ，「いろいろな方法でへびの長さ比べをして，チャンピオンを決めよう」という目的意識をもたせ，学習課題とした。



どうすれば〇〇小学校と長さ比べができるかな。



長さ比べの仕方について勉強して，チャンピオンを決めたいな。



### III 体験発見型

モデルⅠとⅡの発展形といえるモデルである。児童に何らかの体験をさせ、疑問や目的意識を引き出すというものである。児童にとって、食べる、触れる、嗅ぐ、動く等、五感を働かせた体験を伴うことで、対象への距離が縮まり、自分事として考えることができるとともに、児童の感情の振れ幅が大きくなり、「疑問を解決したい」「目的を達成したい」という思いが高まる。体（体験）と頭（思考）と心（感情）が一体となって学習に臨むことができれば、本気の学びを展開することに繋がる。そのために、体験後の児童の素直な気付きや疑問を整理して、学習課題にまで高めていくことが必要である。

#### 実践事例⑥ 4年 総合的な学習の時間「西条の水と龍王山～西条の水のナゾを追え！～」

<本単元のねらい>

- ・酒蔵通りで酒の仕込み水として汲み上げられている水の特徴や価値に気付き、地域を愛する心情を育てる。

課題の設定のポイント！ → 体験から生まれた児童の素直な疑問(?)を整理し、学習課題を立てる

酒蔵通りで各酒蔵の仕込み水の試飲体験をした。各酒蔵が地下から汲み上げた水を実際に見たり、触れたり、味わったりすることで、児童は味を比較してその違いに気付いたり、容器に入れて持ち帰っている人の存在に気付いたりし、「味が違うのはなぜ?」「水を持ち帰った人は何に使うの?」等の疑問が多く出された。それらを類型化することで、自分たちがこれから西条の水のどのようなナゾを探るのかを明らかにすることができた。



・ハクボタンの水は、3日のうちが一番甘かった。わたしは、ハクボタンの水が好き。  
 ・知りたいことは、3日とも、ぜんぶ味がちがったから、どうやたら甘かたうがたりどきるのかを知りたい。  
 ・原料を知りたい。  
 ・社会の水でも、酒蔵通りの、いろいろな水を飲んで、対ひしたい。  
 ・さいしょに行った、福神井戸で、おはあかかいたけど、おと、福神井戸の水がおいしいからだと思った。  
 ・自由研究で、水について、知りたいこときょう味をもた。  
 ・わたしがじゅんいわけるとしたら、1番おいしい水は、いちの水です。



私は、こんなことが不思議に思ったよ。これから調べたいな。



ぼくは、こんなことに気付いたよ。でもなんでなんだろう。

実践事例⑦ 5年 理科「Let's go fishing! NeらったSaかなをゲットだぜ～電流が生み出す力～」

<本単元のねらい>

- ・電流の流れているコイルは、鉄心を磁化する働きがあり、電流の向きが変わると、電磁石の極も変わることや、電磁石の強さは、電流の大きさや導線の巻数によって変わることを捉えることができる。

課題の設定のポイント！ → 夢中になって遊ぶ中から生まれた児童の願いを学習課題へと繋げる

電磁石や磁石を釣り竿にした「魚釣りゲーム」を行う中で、「重い魚や極に反発して逃げる魚も全部釣りたい」という児童の願いが出てきた。そこで、釣り竿を電磁石だけに絞り、電磁石のコイルの巻数、電流の大きさや向きなどに着目させることにより、重い魚を釣り上げたり、極に反発して逃げる魚を釣ったりする方法を予想させ、それを確かめるために単元の学習に取り組んだ。



釣れない魚がいる。  
コイルの巻数を多く  
すれば電磁石が強  
くなり、どの魚も釣  
れるんじゃないかな。



電流の向きを変え  
ると、電磁石の極が  
変わるかもしれない。  
極を変えられたら、  
全部の魚が釣れるぞ！

実践事例⑧ 1年 生活科「あきの おもちゃワールド～つくろう あそぼう～」

<本単元のねらい>

- ・身近な自然物や、身の回りにあるものを使って、おもちゃを工夫して作ったり、遊び方を工夫したりして、遊びの面白さや自然の不思議さに気付くことができる。

課題の設定のポイント！ → 体験することで得た気づきを、学習課題にまで高める

身の回りから集めた自然物を使って遊ぶ中で「きれいだな」「振ったら音がする」などの素直な気づきを出させ、自然の不思議さや美しさに着目させた。さらに、転がしたり投げたりしたときの面白さや偶然性などの気づきから、ゲームやおもちゃを作ってみようとする意欲を高めた。

落ち葉や木の  
実で遊ぶのっ  
て楽しいね。

いろんな色や  
形があって面  
白いね。



転がしたら面白いよ。  
もっと面白い遊びがで  
きそうだよ。

穴をあけてコマみたいにすると楽し  
そうだね。秋の自然を使ったおもちゃ  
をたくさん作って遊んでみたいね！



## Ⅳ 憧れ願い型

児童に「すごい!」「すてき!」という驚きとともに、「やってみたい!」「作ってみたい!」というあこがれをもたせるモデルである。そのあこがれは強い意欲となり、理想達成のための原動力となる。さらに、理想像が児童の中に存在しているため、常に自分の学習過程や習得状況を振り返り、理想像と比較することができる。そのことが学習意欲を継続することにも繋がり、本気の学びを展開することができる。

### 実践事例⑨ 6年 算数科「2000 cm<sup>3</sup>ワールド展を開こう～角柱と円柱の体積～」

<本単元のねらい>

- ・ 図形の角柱及び円柱の体積を計算によって求めることができる。

課題の設定のポイント! → 作品例で児童の興味を引き、「やってみたい」を引き出す

様々な形を組み合わせて、ちょうど 2000 cm<sup>3</sup>になる作品例を提示することにより、児童から「すごい、作ってみたい!」というあこがれをもたせた。児童が、「どうしたら作れるのだろう」という思いをもったため、作品例を観察させ、どのような図形があるかを確認し、既習と未習に分類して課題を設定した。

2000 cm<sup>3</sup>という決まった体積で、こんなにカッコいい作品ができるんだ。ぼくもいろいろ工夫して作ってみたいな。



いろいろな形を組み合わせてあるね。今までに習っていない立体図形も使ってあるよ。それらの体積の求め方を学習したらいいね。

### 実践事例⑩ 5年 国語科「朗読発表会を開こう～大造じいさんとガン～」

<本単元のねらい>

- ・ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、優れた叙述について自分の考えをまとめたり、目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読んだりすることができる。

課題の設定のポイント! → 児童の実態を踏まえた言語活動を設定することで、憧れを引き出す

音声での表現を好む児童の実態から「朗読」を言語活動に設定し、絵本作家の朗読名人を招待して、朗読について教わった。児童は、自分たちの音読との違いに驚き、朗読という活動に憧れを抱いた。そこから自分たちが学ぶべきことを出し合い、学習計画を立てた。



すごい!ぼくたちと全然違うね。こんな朗読がしたいな。何を学習したら朗読名人に近づけるかな。



● 物語の犬まかな流れ  
● 場面の様子  
● 登場人物の心情  
● 伝えるために強調したい大事な言葉や文は?  
● 見つける手かりは?  
● 作者が伝えたこと(作品の主題)  
● 自分が朗読で伝えたいことは?

これらを学習して、ぼくも朗読名人になりたいな。

## V 生活関連型

多くの児童は、学習と生活を切り離して認識している。しかし、実際には学習と生活は密接に関係しており、未習であるがゆえにその関連に気付くことができているだけである。したがって、身近な生活に密着した学習課題を見出すことができれば、児童にとって学習と生活のスムーズな関連が図れると考える。尚、生活場面の中に存在する学習内容を認識させる場合（実践事例⑪）と、生活場面そのものを学習内容として扱う場合（実践事例⑫）がある。

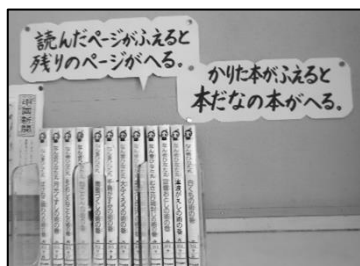
### 実践事例⑪ 4年 算数科「発見！コッチが変わればアッチも変わる～変わり方調べ～」

<本単元のねらい>

- ・ 変わる二つの数量を見出して、それらの関係を表に表して変化の特徴を読み取ったり、□や○などを用いた式に表したりすることができる。

課題の設定のポイント！ → 身近な事象を教科の見方で見直すことで興味を引き出す

身の回りにある具体的な場面やこれまで学習してきた中に含まれるものの例など、いろいろな事象を児童に提示し、「一方の値が変わると他方の値も変わる」という二量の存在に気付かせる。このように「課題の設定」で、伴って変わる二つの数量をより身近なものに感じ取らせ、もっと身の回りの事象を調べてみたいという意欲に繋げた。



身の回りのものを減ったり増えたりする関係で見たことがなかった！何だか楽しそうだね。

身の回りには、一つが増えたら、一つが減る関係になっているものがたくさんありそうだね。



### 実践事例⑫ 1年 生活科「わたしたち さいじょうまつりじっこういいん」

<本単元のねらい>

- ・ 身近な物を利用して遊んだり、遊べるものを作ったりすることで、地域の人や友達と一緒に遊ぶ楽しさに気づき、進んで交流することができる。

課題の設定のポイント！ → 身近な事象から学び、自分たちの活動に生かす

「西条酒まつり」の映像を見たり、参加した経験を交流したりすることで、祭りのイメージを広げるとともに、祭りの内容に関心をもたせた。また、運営面に携わっている人々の働きに着目させ、自分たちが行おうとしている祭りに対しての見通しをもたせた。

「西条酒まつり」では、食べ物を売る店や、射的のように、みんなが楽しめるコーナーがあるね。

案内をしている人もいたよ。飾り付けをしている人もいるね。祭りをするためには、いろいろな仕事が必要なんだね。





## ②「まとめ・振り返り」過程で学びの価値を自覚

本気の学びのためには、学習したことを振り返り、自分の学びの価値、言い換えると学びによって習得した内容や方法を自覚できるようにすることも重要な視点となる。学習内容や学習過程を振り返ることで、児童は「何が分かったのか」「自分や自分たちは、どのように成長したのか」「何をしたから調べることができたのか」「まだ分からないことは何なのか」などをつかむことができる。それが、次の学習に向けて、さらに問い続ける姿勢、つまり本気の学びに繋がっていくと考える。

### ア 「まとめ」過程における活動の工夫

「学習をして何が分かったのかを書いてみましょう」等の声かけをするだけでは、児童に単元全体を通してどのような知識・技能が身に付いたか、どのような力が高まったかを自覚させることは難しい。一時間の授業の振り返りであれば可能かもしれないが、長いスパンを振り返るためには、何らかの手立てを必要とする。そのために、単元末に具体的な活動を通して、単元で習得した知識・技能、思考力・判断力・表現力の高まりを自覚できるようにした。

#### 「まとめ」の五つのモデル

- I 【交流型】 学習したことを生かし、テーマに沿った意見交流をする
- II 【実行型】 学習したことを生かしたゲーム等の活動をする
- III 【提案型】 学習したことを生かして他者や社会に働きかける
- IV 【作品型】 学習したことを生かして、作品を作る
- V 【自己評価型】 学習の過程を振り返り、自己の成長を見つめる

「まとめ」過程における活動は、その活動が単独で行われることのないように留意する必要がある。つまり、児童にとってその活動が有意味であるかどうかを吟味しなくてはならない。そのためには、「課題の設定」過程で立てた学習課題の解決として設定される活動であったり、学習課題を解決することで新たに生まれた課題や、「学習したことを伝えたい」等の児童の願いの実現にかかわる活動であったりすることが重要である。

児童が学びの価値を無理なく自然に自覚できるように、児童にとって目的のある有意味な「まとめ」過程での活動を設定するようにしている。



## I 交流型

学習したことを生かし、テーマに沿った意見交流をするモデルである。互いの考えを語り合うことで、学習内容の定着を図れるとともに、一人一人の考えを広げたり深めたりすることもねらうことができる。音声言語による活動となるため、高学年向きの活動となる。

### 実践事例⑬ 6年 国語科「東広島市の未来をえがこう！～町の幸福論～」

＜本単元のねらい＞

- ・図や表などを用いて説明する方法や、「町の幸福」についての筆者の考えを教材文から学び、図表や資料を活用して自分たちの町の未来についてプレゼンテーションを行うことができる。

**まとめのポイント！** → プレゼン大会で多様な考えに触れ、自己の学びを深め広げる

プレゼンテーションを行う際には、「どんな主張か」「何を伝えようとしている資料か」という視点を示し、互いの考えを聞き合うことで、自分の思いや考えを広げたり深めたりさせた。また、プレゼンテーション終了後に感想を交流させ、この学習を通して様々な考えに触れることで、「町の幸福」への考え方が深まったことを確認させ、成長を実感させた。

## II 実行型

学習したことを生かしたゲーム等の活動をするモデルである。「課題の設定」過程でうまくいかなかったことができるようになったり、より楽しめるようになったりすることで、学びの価値を自覚させることができる。

### 実践事例⑭ 1年 算数科「みずくみんピック！2019～どちらがおおい？～」

＜本単元のねらい＞

- ・体積の比較などの活動を通して、体積の基本的な概念と初歩的な測定についての理解の基礎となる経験を豊かにすることができる。

**まとめのポイント！** → 作戦を立てさせることで学びを生かし、学びの価値を自覚させる

「課題の設定」過程で、水を一番多く入れられる容器を選択して、それを用いて大きな容器に水をなるべく少ない回数で移し替えるゲーム「みずくみんピック」を行い、うまくいかない状況から「水はかせになって勝つ作戦を立てよう」という学習課題を設定した。「まとめ・振り返り」過程では、これまでの学習内容を活用して作戦を立て、再度ゲームを行うことで、学習したことのよさを自覚させた。

### Ⅲ 提案型

学習した内容を活用して、他者や社会に働きかけるモデルである。「周りの人にも〇〇(学習した内容)を知ってほしい」「〇〇について協力してほしい」等の児童の願いから生まれる活動である。相手意識が高い活動となるため、児童の意欲を引き出すことができ、より主体的に学びの価値を認識させることに繋がる。

#### 実践事例⑮ 4年 社会科「緊急指令！消防のヒミツを調査せよ～安全なくらしを守る～」

〈本単元のねらい〉

- ・消防署や関係諸機関、地域の消防団の人々が相互に協力しながら地域の安全を守っていることを理解することができる。

**まとめのポイント！ → 相手意識を高め、単元の学びを振り返り、活用させる**

消防の工夫に関する獲得した知識を基に、地域の安全を守っている消防士の仕事や努力、工夫について動画にまとめ、校内放送で全校に紹介する機会を設け、相手意識を高めた。児童は、紹介する内容や言葉について学級で吟味することを通して単元の学びを整理しながら振り返った。また、自分たちができることについて、協力のお願いという形で紹介することで、「自助」の視点の振り返りに繋げた。

### Ⅳ 作品型

学習したことを生かしたものづくりをするモデルである。作品については、モデルⅡと同様に「課題の設定」過程との繋がりがあがるものが望ましい。「〇〇が作りたい」「〇〇にまとめたい」という思いや願いから始まった単元の学習のゴールとしての作品であれば、児童の学びの価値の自覚がより高いものなると考えられる。

#### 実践事例⑯ 2年 国語科「2年1組むかし話村をつくろう！～かさこじそう～」

〈本単元のねらい〉

- ・いろいろな昔話を読んで昔話に親しむとともに、その面白さを同じ視点で友達と伝え合う活動を通して、読書の幅を広げることができる。

**まとめのポイント！ → 単元を通して学んできた視点を生かした振り返りで学習をまとめる**

様々な昔話の中からお気に入りの昔話の一つを選び、学んだことを基に「出来事や展開」「登場人物の人物柄や考え方」「語り口調や言い回し」の三つの視点から紹介カードにまとめさせた。その紹介カードを使いながらお気に入りの昔話を紹介することで、昔話にさらに親しませ、読書の幅を広げたり意欲を高めたりした。

## 実践事例⑰ 6年 算数科「2000 cm<sup>3</sup>ワールド展を開こう～角柱と円柱の体積～」

<本単元のねらい>

- ・ 図形の角柱及び円柱の体積を計算によって求めることができる。

**まとめのポイント！ → 作品づくりを楽しみながら知識・技能を活用させる**

本単元のねらいは、「体積を計算によって求めることができる」だが、ちょうど2000 cm<sup>3</sup>になる作品を製作するためには、体積を求めるのとは逆の考え方をする必要があるのである。逆の考え方をすることで、学習内容を振り返りながら活用することができた。また、ある程度の大きさとなる一つの作品に仕上げることで、児童が目的意識をもって楽しみながら製作することができたとともに、既習を含む様々な立体の体積を考えることになり、立体の体積のまとめとすることができた。

## V 自己評価型

学習の過程を振り返り、自己の成長や学習過程（学習方法）を見つめ、まとめるモデルである。主に生活科や総合的な学習の時間に行う。特に総合的な学習では、長いスパンで探究的な学習を行う中で、独創スピリッツ（資質・能力）を育成するため、途中で意欲が減少することもある。そのため、自己評価によって自分の成長を確かめながら学習を行う必要がある。さらに、学習方法を振り返ることで、次の探究のための見通しをもつことも可能となる。

## 実践事例⑱ 4年 総合的な学習の時間「西条の水と龍王山～西条の水のナゾを追え！～」

<本単元のねらい>

- ・ 酒蔵通りで酒の仕込み水として汲み上げられている水の特質や価値に気づき、地域を愛する心情を育てる

**まとめのポイント！ → 対象についての思いを視覚化することで、内面の変化に気付かせる**

円グラフで西条の水に対する思いを表した。その際、これまで行ってきた活動を列挙し、その活動と西条の水に対する思いの変化を関連付けて考えさせた。様々な活動を通して、学習前と比較して西条の水への思いが高まってきたことを自覚することができた。



## イ 「振り返り」過程における活動の工夫

学びの価値を自覚させるために、一時間の授業の終末や、単元終了後に次のような内容について振り返り、言葉で表現させた。授業の終末に書かせる場合には、授業内容に合わせて視点を絞って書かせるようにし、単元終了後には、全ての視点で振り返りを書かせるようにした。

<b>「振り返り」の視点</b>	<b>わ</b> かった
①次に生かせる教訓	<b>つ</b> かえる
・内容にかかわる教訓	<b>き</b> をつけよう
・学習方法にかかわる教訓	<b>や</b> ってみたい
②学習内容や対象の価値	

①の次に生かせる教訓は、学習による自己の成長や考えの変容を自覚させることを目的に書かせている。次に生かせる教訓のうち、内容にかかわる教訓は、学習を通して分かったことや分からなかったことを書かせる。何が分かって何が分からないのかを自覚させることで、次に知りたいことや学びたいことへの意欲が生まれ、他の場合に学習を生かせようという発展的な問いが生まれやすくなる。学習方法にかかわる教訓は、学習過程を振り返り、「課題を解決するとき大切なことは何か」「どんな方法が有効だったか」「どうすればよりよく課題を解決できたのか」等を書かせる。これを積み重ねることにより、次の学習で同じ方法で解決しようとしたり、間違いやすいところに気を付けようとしたりするなど、児童が自律的に学習を進める態度を育成することができる。

②の学習内容や対象の価値は、「単元の学習内容がどのように生活や他教科等の学習に役立つか」を書かせる。総合的な学習の時間では、学習対象の価値（よさ）を振り返らせ、地域への愛着を高めていく。



### (3) 児童が深く学ぶ授業に向けて

各教科等における「深い学び」について、中央教育審議会「審議のまとめ」には以下のように示されている（表1）。それらを分析し、各教科等における「深い学び」に共通している点は次の3点であると考えた。

- ①各教科等における「深い学び」には、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」が位置付けられていること。
- ②各教科等における「思考・判断・表現」を通じた学習活動となっていること。
- ③1 単位時間ではなく、本校の取り組んでいる「課題発見・解決学習」に表されるような、一連の学びの過程の中に位置付く学びであること。

以上のことから、本校では「深い学び」を、「探究的な学習過程において、各教科等の見方・考え方を働かせながら思考を深める学び」と捉えた。

したがって、『学びの深化』、『整理・分析』過程の設定、「見方・考え方を働かせる指導の工夫」の二つの観点から「児童が深く学ぶ授業の創造」を実現できるようにした。

表1 各教科等における「深い学び」

国 語 科	「言葉による見方・考え方」を働かせ <sup>①</sup> 、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動 <sup>②</sup> を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり <sup>③</sup> 、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深める <sup>②</sup> こと
社 会 科	「社会的な見方・考え方」を用いた <sup>①</sup> 考察、構想や、説明、議論等の学習活動 <sup>②</sup> が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動 <sup>③</sup> 。教科・科目及び分野の特質に根ざした追究の視点と、それを生かした課題（問い）の設定、諸資料等を基にした多面的・多角的な考察、社会に見られる課題の解決に向けた広い視野からの構想（選択・判断）、論理的な説明、合意形成や社会参画を視野に入れながらの議論など <sup>②</sup> を通し、主として用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、主として社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計すること
算 数 科	「数学的な見方・考え方」を働かせ <sup>①</sup> 、数学的活動を通して、新しい概念を形成したり、よりよい方法を見出したりする <sup>②</sup> など、新たな知識・技能を身に付けてそれらを統合し、思考、態度が変容する <sup>②</sup> 「深い学び」を実現すること

理科	「理科の見方・考え方」を働かせて①、探究の過程を通して学ぶ③ことにより、資質・能力を獲得するとともに、「見方・考え方」も豊かで確かなものとなると考えられる。さらに、次の学習や日常生活などにおける問題発見・解決の場面において、獲得した資質・能力に支えられた「見方・考え方」を働かせる③こと
生活科	「身近な生活に関わる見方・考え方」を生かした①学習活動が充実することで、気付いたことを基に考え、新たな気づきを生み出し、関係的な気づきを獲得する②などの「深い学び」を実現すること
総合的な学習の時間	実社会・実生活に即した学習課題について探究的に学ぶ③中③で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的に働かせることで①、個別の知識や技能は関連付けられて概念化し②、能力は実際の活用場面と結び付いて汎用的になり、多様な文脈で使えるものとなること

中央教育審議会「審議のまとめ」より 一部抜粋

### ① 「学びの深化」「整理・分析」過程の設定

本校では、各教科の学習において四つの過程をとっている。「課題の設定」過程では、児童が課題意識をもって学習に取り組むことができるように学習課題を立てさせる。「課題の追求」過程では、学習課題の解決のために必要な知識や技能を身に付けさせる。「学びの深化」過程では、「課題の追求」で身に付けた知識や概念を総合的、統一的に捉えたり、それらを活用したりして、より深い理解によって課題を解決させる。「まとめ・振り返り」過程では、単元の学習を通して身に付けた知識・技能、自己の成長等を振り返り、学びの価値を実感させる。この四つの過程をとることで、児童が探究的に学ぶことができるようにしている。

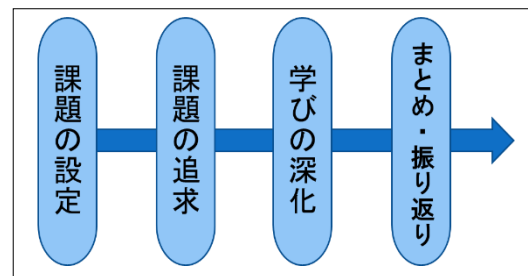


図1 各教科における学習の過程

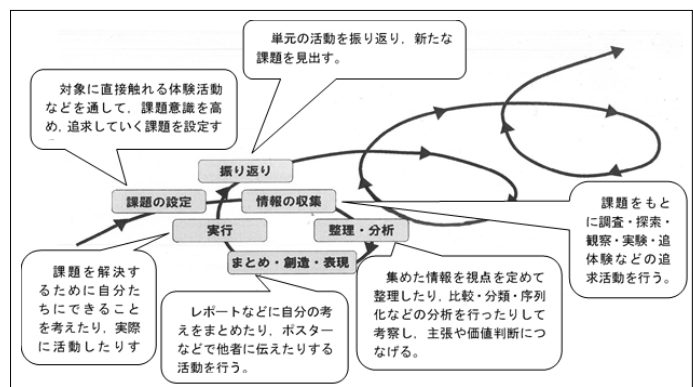


図2 「課題発見・解決学習」の過程（イメージ）

また、総合的な学習の時間においては、図2のような広島県教育委員会が示した「課題発見・解決学習」の六つの過程をとっている。

これらの過程の中で、児童が深く学ぶ授業を創造するために、教科における「学びの深化」と総合的な学習の時間における「整理・分析」の二つの過程の充実を図ることとした。

## ア 各教科における「学びの深化」過程, 「整理・分析」過程

「学びの深化」過程は、先ほども述べた通り、「課題の追求」で身に付けた知識や概念を総合的、統一的に捉えたり、それらを活用したりして、より深い理解によって課題を解決させる過程である。そのため、各教科等の特質が色濃く出ることとなる。したがって、各教科によってその過程の捉えが少しずつ違ってくる。その違いを明確にして授業を行うことが、児童が深く学ぶことに繋がると考えた。下の表は、各教科等の「学びの深化」過程の捉えをまとめたものである。尚、総合的な学習の時間の「整理・分析」過程については、広島県教育委員会が示したものを基にして「集めた情報を視点を定めて整理したり、比較・分類・序列化などの分析を行ったりして考察し、主張や価値判断に繋げる」と捉えることとしている。

表2 各教科における「学びの深化」の捉え

国語科	「課題の追求」過程において習得した、情報と情報の関係を捉えて文章を読み取る力を活用して、関連図書を読み取る。
社会科	「課題の追求」過程において学んできた社会的事象について、多様な視点から捉え直したり、多様な立場から捉え直したりして、その社会的事象についての捉え方を深めたり、広げたりする。
算数科	「課題の追求」過程において学んできた内容を、新たな視点で見たり、他単元の学習内容と関連させ、複合的に学習課題を解決したりする。
理科	「課題の追求」過程において習得した知識・技能を生かして、単元を貫く課題を解決したり、新たな視点から学習内容を捉え直したりする。
生活科	「課題の追求」過程で学んできた様々な事象について、自分とのかかわりの視点で捉え直す。

このように、教科の特質を踏まえて「学びの深化」「整理・分析」過程で行う学習活動を設定することで、児童が深く学ぶ授業に繋げるようにした。



## ②見方・考え方を働かせる指導の工夫

### ア 見方・考え方とは

児童は各教科の学習において、様々な知識や技能を習得する。しかし、各教科における大量の個別的知識を所有することが学習する目的ではない。身に付けた知識や技能を様々な場面で自在に駆使し、質の高い問題解決を成し遂げる力をつけることが目的である。そこで、「見方・考え方」が必要となってくる。どのように対象を捉えるかといった教科等固有の対象を捉える視点(見方)や、どのように対象とかがわり、どのように対象に迫るかといった教科等固有のアプローチの仕方やプロセス(考え方)を身に付けることで、各教科固有の学びとなり、知識が単なる事実の羅列ではなく生きて働く知識、いわゆる概念的知識となる。中央教育審議会答申においても、「見方・考え方」について、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が『見方・考え方』であり、各教科等の学習の中で働くだけでなく、大人になって生活していくに当たっても重要な働きをするものとなる。私たちが社会生活の中で、データを見ながら考えたり、アイデアを言葉で表現したりする時には、学校教育を通じて身に付けた『数学的な見方・考え方』や、『言葉による見方・考え方』が働いている。各教科等の学びの中で鍛えられた『見方・考え方』を働かせながら、世の中の様々な物事を理解し思考し、よりよい社会や自らの人生を創り出していると考えられる。」と述べている。

このように「見方・考え方」とは、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして、各教科等の教育と社会を繋ぐものであるといえる。

さらに、具体的な各教科等における「見方・考え方」については、小学校学習指導要領（平成29年告示）では、以下のように示されている（表3）。それらを分析すると、各教科等における「見方・考え方」に共通している点は次の3点であると考えた。

- ①「見方・考え方」には、各教科等の思考・判断・表現にかかわる学習活動の方向性が示されている
- ②「見方」には、学習において着目させる視点が示されており、各教科等の特質が表されている
- ③「考え方」には、「比較」「関連付け」等、各教科に共通する思考の仕方が表されている

以上のことから、本校では「見方・考え方」を、「各教科の特質を踏まえた思考・判断・表現の方向性を示すもの」と捉え、思考・判断・表現とのかかわりの強い「深い学び」を実現するためには、見方・考え方を働かせることが必要不可欠であると考えた。

## イ 見方・考え方を働かせるとは

各教科等における「見方・考え方」は、教科ならではの見方（視点）や考え方（思考の枠組み）であり、実際の授業においては、教科の目標を達成するための「深い学び」を実現する手段として位置付く。そのため、各教科等の知識・技能と思考力・判断力・表現力を互いに結び付け、概念や技能を獲得していくための道具といえる。そしてその道具を使うことを通して、概念やより高度な技能を獲得したり、知識や技能を活用して思考したりすることが見方・考え方を働かせるということと考える（図3）。

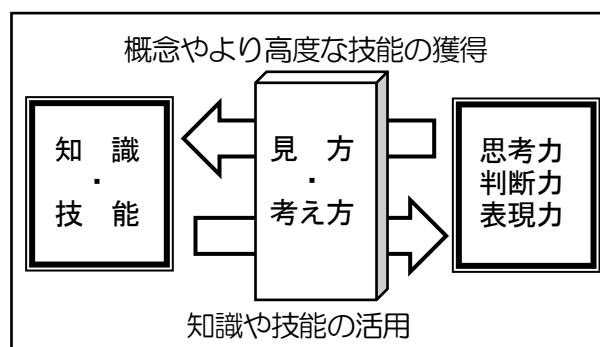


図3 「見方・考え方」を働かせるイメージ図

したがって、授業を創造する際には、①目標に照らし合わせて獲得すべき概念や技能を設定する。②それらにかかわる知識・技能や思考力・判断力・表現力を明確にする ③活動、問い、資料等、各教科の特質に応じた方法で見方・考え方を働かせて思考させる指導方法を構想する、という過程で授業構成を行う。その際、児童が「見方・考え方」を働かせるように、教師が意図的に仕組むことが重要である。例えば、児童に「比較して考えましょう」と声をかけるのではなく、児童が比較して考えたいような資料を二つ並べて提示するというように、児童が「見方・考え方」を自然と働かせて考えることができるようにした。

表3 各教科等における「見方・考え方」

国語科	児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり 問い直したりして、言葉への自覚を高めること
社会科	社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること
算数科	事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考え、統合的・発展的に考えること
理科	自然の事物・現象を量的・関係的、質的・実体的、多様性と共通性、時間的・空間的な視点で捉え、比較、関係付け、条件制御、多面的に考えること
生活科	身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする事
各教科等における見方・考え方の働かせること	各教科等における見方・考え方を総合的に働かせるということ 特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉えること